国立教育政策研究所　平成２２，２３年度指定
地域等の課題に応じた教育課程研究事業

山口県 光市 大和地域 小・中連携教育 実践研究

研　究　報　告

共に学び合い自己実現を図ろうとする大和（やまと）っ子の育成

～豊かな人間関係と学びの確立を目指した小・中連携の在り方～

大和地域小・中連携教育実践研究委員会

光市立大和中学校　光市立塩田小学校　光市立三輪小学校
光市立岩田小学校　光市立束荷小学校

あ　い　さ　つ

平成２２年度・２３年度指定、国立教育政策研究所「地域等の課題に応じた教育課程研究事業」光市大和地域 小・中連携教育 実践研究発表会の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。

本市は、平成１６年１０月４日、旧光市と旧大和町が合併し、新しい「光市」として誕生しました。「光る個性 地域の和 人と自然にやさしい生活創造都市」を将来像に掲げ、現在８年目を迎えています。瀬戸内の温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれるとともに、「おっぱい都市宣言」「自然敬愛都市宣言」「安全・安心都市宣言」の３つの都市宣言のもと、豊かな心と明るい笑顔が溢れるまちです。学校の教育現場においては、「夢光り、活力あふれる学校の創造～ふるさと光市をこよなく愛し、夢と希望と誇りをもった子どもの育成～」を目標とし、未来を担う子どもたちの健全育成を目指し、日々の教育活動に取り組んでいるところです。

さて、思春期を迎える小学校高学年から中学校にかけては、心身の成長や変化が一生のうちで最も大きく、精神的に不安定な時期を迎えることから、学習・生活面ともに充実した指導・支援が望まれるところであります。平成１１年１２月の中央教育審議会答申で、「今日の子どもは、心身の発達の早まりに比べ、生活の自律や進路選択の意識面では、自立が遅れる傾向にある」と指摘されるなど、小・中連携教育に関する重要性が取り上げられて久しい現状があります。また、社会の変化に対応した、多様な教育の実現を求める声も年々高まっているところです。小学校と中学校の滑らかな接続を実現するために、小・中学校が互いに連携を図った教育をどう展開していくかということは、現在の教育現場において喫緊の課題の一つであるといえます。

本市の塩田小学校、三輪小学校、岩田小学校、束荷小学校と大和中学校の５校は、小・中連携教育実践研究協力校として「共に学び合い自己実現を図ろうとする大和っ子の育成」を研究主題に、小学校と中学校の連携の在り方について、２年間にわたり研究を進めてきました。さらに、本年３月、東日本を襲った未曾有の大震災の後、全国各地で「絆」「つながり」に支えられた復興に向けての取組が展開され、その願いや思いを子どもたちに伝え、育んでいくことが教育の使命であるとも考え、本研究の一層の充実に努めてまいりました。

このたび、その成果を発表する機会を得て、多くの皆様のご参加をいただきました。皆様のご批正を仰ぎながら、研究を一層深めてまいりたいと考えております。また、各学校においては、実情に応じて研究内容を発展・深化させ、本研究のさらなる充実を考えているところでございます。

最後になりますが、これまでご指導とご協力をいただきました国立教育政策研究所、山口県教育委員会、また、全面的に本研究をご支援いただきました関係者の皆様、大和地域各小・中学校ＰＴＡの皆様に心から感謝を申し上げまして、ご挨拶といたします。

光　市　教　育　委　員　会
教育長　　能　美　龍　文

は　じ　め　に

私たちは、小・中連携教育に取り組む意義を次の４つにとらえました。

１．学力向上の意義
　小中９年間の学びの連続性を踏まえ、小中の相違点を認識したうえで基礎・基本の確実な定着を目指し、確かな学力を身に付けさせること。

２．生徒指導、滑らかな接続における意義
　小中学校間の交流を深め、一貫した指導方針や指導内容によって小学校と中学校での学校生活でのとまどいを解消し、接続の円滑化を図ること。
　小中の指導法について連携を図り、児童生徒の生活上のスキルを系統的に高めること。

３．豊かな人間性に関する意義
　児童生徒の異年齢間等の交流を通して、それぞれの校種内で経験できない刺激を受けることで、児童生徒の自尊心や向上心を育て、豊かな人間性や社会性を身に付けさせること。

４．教職員間の相互理解、資質の向上の意義
　連携教育の可能性を探る中で、小・中学校の教員が相互の壁を越えて相手の取組を理解し、資質の向上を図ること。

大和地域は４小学校１中学校があります。小学校は複式学級を有する２つの学校と学年各１学級を有する２つの学校であり、それぞれの学校の地理的条件や環境、教育の伝統や方針、方法の違いもあります。上記小・中連携教育の意義は理解できるが、具体的に何をどうするか、その試行錯誤の連続のなか、教職員は知恵を出しあい努力を重ね合い、遅々としてではありますが研究実践を行い、ささやかながらその成果が見え始めてきたところであります。

本研究報告は、２年間の研究実践をまとめたものですが、今後も「９年間で大和地域の子を育てる」という「チーム大和」に、何とぞ、皆様の厳しいご指導ご助言をお願い申し上げます。

末尾になりましたが、ここに至るまで国立教育政策研究所、県教育委員会の先生方、および関係の先生方には、多くのご指導ご助言をいただいたこと、ここに深く感謝申し上げます。

光市大和地域小・中連携教育実践研究委員会
会長　　赤　　松　　知

○　あいさつ　　光市教育委員会　教育長　能美龍文
○　はじめに　　大和地域小・中連携教育実践研究委員会　会　長　赤松　知

目　　次

Ⅰ　研究の取組

１　大和地域小・中連携教育の全体構想　・・・・・・・・・・　１

（１）実践研究課題
（２）研究課題設定の理由（地域の特色や課題）
（３）平成２２年度の研究　成果と課題
（４）平成２３年度の研究　研究課題の解明に向けて
（５）研究の全体構想図
（６）研究組織
（７）研究計画

２　きき合い学び合う力を育む授業改善研究部会　・・・・・・・・・　７

（１）研究の取組
（２）取組の成果と課題

３　コミュニケーション能力を育む
外国語活動・外国語科連携研究部会　・・・・・・・・　１５

（１）研究の取組
（２）取組の成果と課題

４　豊かな人間関係を育む交流学習推進部会　・・・・・・・・・・・　２４

（１）研究の取組
（２）取組の成果と課題

Ⅱ　２年間の研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・　３０
・　２年次児童・生徒へのアンケートの集計結果と考察　・・・・・・　３２

Ⅲ　参考資料
・　平成２２年度の取組の内容と成果と課題　・・・・・　３６
・　１年次児童・生徒へのアンケートの集計結果と考察　・・・・・　５７
・　小・中連携だより　・・・・・　６１

○　おわりに

1　全　体　構　想

1　大和地域小・中連携教育の全体構想

（１）実践研究課題

共に学び合い自己実現を図ろうとする大和っ子の育成 ～豊かな人間関係と学びの確立を目指した小・中連携の在り方～

（２）研究課題設定の理由（地域の特色や課題）

光市大和地区は、山口県の東部、光市の北部に位置し、周囲を低い山々に囲まれた丘陵地帯で、美しい緑に囲まれた自然みあふれる静かな地域である。初代内閣総理大臣伊藤博文の生誕の地でもある。

地域内には、小・中合わせて５校の学校があり（小学校４校、中学校１校)、小学校は２校の小規模校、２校の中規模校からなる。

各学校内には、美しい花木が広がり、その環境のなかで、子どもたちは健やかかつ伸びやかに成長している。中学校は、部活動が盛んであり、なかでも陸上競技においては、平成20年度の全国駅伝大会で優勝を果たすなど高い成果を収めている。

一方、課題としては、言葉によるコミュニケーションの不十分さから、相手の意見や行動を理解し、尊重する意識が希薄なため、授業に集中ができなかったり、児童間・生徒間のトラブルがあったりし、それが問題行動に発展する事案も生じている。

伊藤博文公銅像

また、小、中規模校ゆえに、それぞれの小学校で固定化さ.れた人間関係や学校ごとに異なる学習規律・生活習慣が，中学校への進学によって変化することにより、集団としてまとまることが困難な傾向が見られる。

さらには、一部には中一ギャップという言葉に代表されるように、中学校での生活や新たな人間関係づくり、教科担任制などの学習環境の変化に必要以上に緊張感を抱き、中学校生活にスムーズに適応できない生徒もいる。

このような諸課題を解決するには、小・中学校が連携して学習や生活上の問題について現状把握を深め、共に児童生徒を育てる方向性を共有化し、協働実践を行っていくことが大切である。

将来的には、この小・中連携の取組を足がかりとして「連携」の大切さや有効性を実証すると共に、大和地域のコミュニティー全体に広げ、地域全体で子どもたちの育ちを共有し、支援する体制の構築に発展させたいと考える。

大和地域（石城山）

（３）平成２２年度の研究　成果と課題

これらの視点から、研究指定１年次に当たる平成22年度は次の３点に取り組んできたが、その成果と課題は次のとおりである。

①授業改善の推進

「自分の考えを持ち、伝える場の設定」を授業改善の視点とした。成果として、個々の教員の授業改善の意識と、大和地域としての教師の課題意識の共有化とともに連携意識が高まってきた。また、外国語活動(小）と外国語科(中）との学習内容や指導方法などの連携を行ったことは大きな成果であった。しかし、児童生徒の自己肯定感の高揚や学級内の支持的風土の醸成については課題を残しており、コミニュケーション能力の育成を中心とした授業改善に取り組んでいく必要がある。

②交流活動の推進

誰とでも進んでコミュニケーションをとることのできる、思いやりの心をもった児童生徒の育成を目指し、中学生が小学校を訪問し交流を図った。中学生は自己有用感を味わうとともに思いやりの心が芽生え、小学生は中学校または中学生への憧れの心を抱くことができた。今後、一層のコミュニケーション能力の育成、豊かな人間関係、滑らかな接続を目指し、「小から中へ」、また「小と小」の交流実践が課題となる。

③学習習慣及び生活習慣の確立

児童生徒や保護者対象のアンケート調査を行い、これをもとに発達段階を考慮しながらの共通の「学習のきまり」、「家庭学習の手引き」、「生活習慣づくりのためのチェックカード」等を作成し、児童生徒への指導や家庭への周知を行った。今後、一層の指導、周知を継続して行い、変容を確認し、望ましい学習習慣や望ましい生活習慣の確立を図っていく必要がある。

（４）平成23年度の研究　研究課題の解明に向けて

昨年度の学習習慣及び生活習慣づくりでの成果を土台として、コミュニケーションに欠かせない「きく・きき合う」機能に焦点をあて、主体的に学ぶ姿勢や支持的学習集団の醸成を通して自己肯定感の高揚を図るとともに、小・中及び学年間の滑らかな接続，豊かな人間関係の育成を目指し、次の３点の研究に取り組むこととした。

①きき合い学び合う力を育む授業改善研究部会

コミュニケーション能力の中でも「きき合い学び合う力」に着目して授業改善を進めることで、支持的な集団づくりを進め、児童生徒に、相手の気持ちや考えを尊重する態度と主体的に学習に取り組む姿勢を育て、「生きる力」を育成する。そのために、「きく力」の育成を目指す取組と授業構造を意識した授業改善を行う。

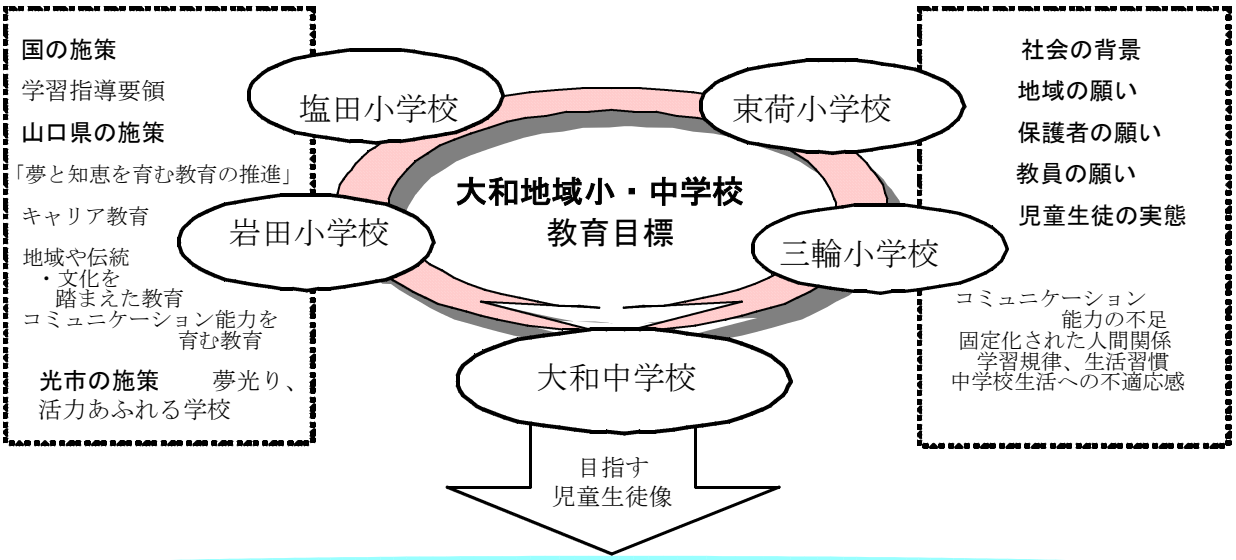
②コミュニケーション能力を育む外国語活動・外国語科連携研究部会

小学校「外国語活動」と中学校「外国語科」とのカリキュラムやアクティビティ、クラスルーム・イングリッシュ、英語ノート、教材等の連携を図ることで、児童生徒の学習意欲を高めるとともに言語活動を活発にし、コミュニケーション能力を向上させる。そのための内容、指導法，教材の連携について研究を進める。

③豊かな人間関係を育む交流学習推進部会

中学生と小学生が共に学び合う交流学習を効果的に実施することにより、中学生に自己有用感を味わわせるとともに思いやりの心を育てる。また、小学生には中学校生活や中学生への憧れを抱かせ、小・中の滑らかな接続を図るとともに、豊かな人間関係を構築する。そのために、中から小へ、小から中へ、小と小など多様な交流を工夫し、実施する。

（５）研究の全体構想図



研究主題

共に学び合い自己実現を図ろうとする大和っ子の育成
～豊かな人間関係と学びの確立を目指した小・中連携の在り方～

研究目標

コミュニケーション能力の向上を図ることで、児童生徒の豊かな人間関係づくりを推進し、主体的に取り組む学習習慣の確立など「生きる力」を育成する。

研究実践

「きき合い学び合う力」に着目して授業改善を進め、相手の気持ちや考えを尊重する態度と主体的に学習に取り組む姿勢を育てる。

きき合い学び合う力を育む
授業改善研究部会

「きく力」の育成と授業構造を意識した授業改善

研究実践

「外国語活動」と「外国語科」との連携を図ることで、学習意欲を高めるとともに言語活動を活発にし、コミュニケーション能力を向上させる。

コミュニケーション能力を
育む外国語活動・外国語科
連携研究部会

内容、指導法、教材の連携についての研究

研究実践

交流学習を効果的に実施することにより、小・中の滑らかな接続を図るとともに、豊かな人間関係を構築する。

豊かな人間関係を育む
交流学習推進部会

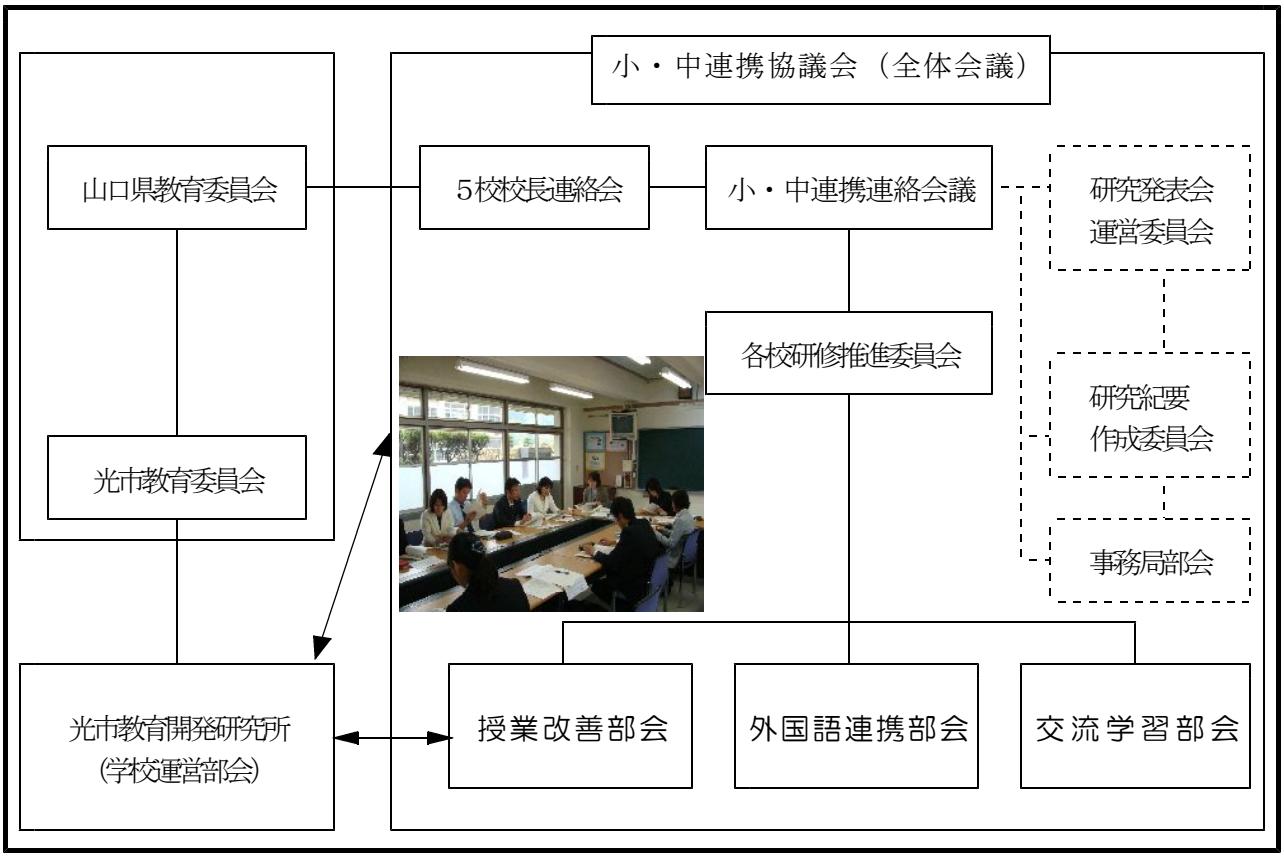
中から小へ、小から中へ、小と小など多様な交流の工夫と実施

○基本的な生活習慣
身構え・物構え・心構え
家庭の日キャンペーン
すこやか週間

○小中連携だより

○望ましい学習習慣
小・中９年間一貫した
「学習のきまり」
「家庭学習の手引き」

（６）研究組織



（７）研究計画

月	期日，研究方法，研究内容	研究のねらい
４月	６日　○**小・中連携連絡会議①** 実践研究の全体構想、仮説，研修計画と方法等の共通理解、研究内容と組織づくり ２７日　**◎小・中連携協議会①** 全体会で全体構想、仮説、研修計画と方法等の共通理解《「授業改善部会》、《外国語連携研究部会》、《交流学習推進部会》の部会別研修で研究内容と研修計画づくり	・　一年次の成果と課題を共有化することで、児童・生徒の実態に即した実践研究に焦点化する。 ・ 本年度の研究の方向性や研究発表会に向けた取組を小・中全教職員で共有化する。 ・　各部会の今年度の研修計画を立案する。
５月	１２日　○**小・中連携連絡会議②** 各部会及び委員会の情報交換と実践研究の方向性検討 部会構成と研究内容検討 ２４日　◎**小・中連携教育研究協議会**（国研主催）に出席 小・中連携教育実践研究についての説明・指導	・　今年度全体での取組を確認する。 ・　今年度の取組について指導を受け、研究計画を修正する。

６月	１日　**○小・中連携協議会②** **第2回小・中連携教育研究会議 兼 新入生情報交換会** **《授業改善部会》、《外国語連携研究部会》の授業公開及び研究協議**…大和中 《授業改善部会》、《外国語連携研究部会》、《交流学習推進部会》の授業公開に関する研究計画、アンケート案検討 １日　**○小・中連携連絡会議③** 情報交換による研究推進状況確認と研究計画の修正 アンケート調査内容・実施方法についての確認 ９日　**○《授業改善部会》** 研修計画確認 ２１日　**○《交流学習推進部会》の小６・中３交流授業公開及び研究協議**…大和中・４小学校 小・中交流学習、小・小交流学習の実施計画立案 ２８日　**○《交流学習推進部会》２１日の授業研究協議** 小・中交流学習、小・小交流学習の実施計画立案 ２９日　**○《授業改善部会》授業公開及び研究協議**…岩田小 授業公開及び研究協議	・　実際の授業を公開し合うことにより、授業改善の視点を明確にする。 ・　アンケート内容を精選したり、交流学習の実施内容、方法を検討したりすることにより、育てたい児童・生徒の姿を明確にする。
７月	７日　**○小・小交流授業**…三輪小・塩田小 １１日　**○国立教育政策研究所中間視察** 研究推進状況確認と指導・助言を受けての研究計画の修正 アンケート調査結果の集計と分析 １１日　**○《外国語連携研究部会》授業公開及び研究協議** …岩田小・東荷小 授業公開、授業研究会，アンケート調査結果の集計と分析 １５日　**○小・小交流授業**…岩田小・塩田小 ２８日　**○《外国語連携研究部会》** **発表会指導案・紀要原稿作成について**	・　実際の授業を公開し合い、研究を重ねることにより、授業改善を推進する。 ・　アンケート結果から，現時点での児童・生徒の実態と課題を明確にする。
８月	２日　**○《外国語連携研究部会》** **発表会指導案・紀要原稿作成について** **○《授業改善部会》** **発表会指導案・紀要原稿作成について** ９日　**○《交流学習推進部会》** **発表会指導案・紀要原稿作成について** ２９日　**○《授業改善部会》** 発表会指導案検討	・　発表会に向けた指導案や研究紀要を検討、作成することにより、これまでの取組の確認をする。
９月	２２日　**○《授業改善部会》** 発表会指導案作成，研究紀要原稿作成，授業公開及び研究協議	・　発表会に向けた指導案や研究紀要を検討、作成することにより、

９月	１６日　○**《外国語連携研究部会》** 発表会指導案作成、研究紀要原稿作成、授業公開及び研究協議 １２日　○**《交流学習推進部会》** 発表会指導案作成、研究紀要原稿作成、小・中交流学習の実施 ２９日　○小・中交流学習事前打合せ…大和中・４小学校	これまでの取組の確認をする。 ・　実際の授業を公開し合い、研究を重ねることにより、授業改善を推進する。
10 月	４日　○**小・中連携連絡会議④** 情報交換による研究進捗状況の確認と研究計画の修正 アンケート調査結果の集計と分析 １１日　○小・中交流学習…大和中・４小学校 １３日　○**《授業改善部会》** 授業公開、授業研究会、アンケート調査結果の集計と分析 １４日　○**《外国語連携研究部会》** 授業公開、授業研究会、アンケート調査結果の集計と分析 １７日　○**《交流学習推進部会》** アンケート調査結果の集計と分析、小・中交流学習資料（映像）の編集	・　小・中交流学習の実施やアンケート結果を基にした児童生徒の変容から、研究の成果と今後の課題を明確にする。
11 月	１日　○**小・中連携連絡会議⑤** 情報交換による研究進捗状況の確認と研究計画の修正 ４日　○小・中交流学習…大和中・４小学校 ２４日　◎**小・中連携教育実践研究発表会** これまでの小・中連携教育の成果の発表	・　研究発表会をとおして、児童・生徒の変容から、研究の成果と課題を多くの小・中学校で共有する。
12 月	６日　◎**小・中連携協議会④** 《授業改善部会》、《外国語連携研究部会》、《交流学習推進部会》のここまでの成果と今後の課題のまとめ １９日　○**小・中連携連絡会議⑧** 今年度の成果と今後の課題のまとめ	・　児童・生徒の変容から、授業改善、カリキュラムを含む研究の成果と課題を明確にする。
１月	１２日　○**小・中連携連絡会議⑥** 研究報告書の作成 ３１日　◎**小・中連携教育研究協議会**（国研主催）に出席 小・中連携教育実践研究についての発表・報告	・　小中連携実践研究のまとめを確認する。
２月	３日　○**小・中連携連絡会議⑦** 研究報告書の確認、送付、次年度の計画	・　次年度に引き継ぐ小中連携の取組を明確にする。
３月	８日　○**小・中連携連絡会議⑧** 平成２４年度の小・中連携教育計画立案	・　次年度に実施する小中連携の取組を確認し、共有化する。

２　きき合い学び合う力を育む
授 業 改 善 研 究 部 会

1　研究の取組

（1）　部会のねらいと期待される成果

ねらい

「きき合い学び合う授業づくり」を視点に授業改善に取り組むことによって、コミュニケーション能力の育成・向上を図る。

期待される成果

・自分の思いや考えをもち、相手に伝えることができる。
・相手の気持ちや考えを尊重しながらきくことができる。
・きくことによって、自分の考えを広げたり、深めたりできる。

（2）　ねらい達成の方途

①「きき合い学び合う力」についての共通理解

１年次の研究を元に、「授業における学び合う児童生徒の具体的な姿」をより焦点化するために、小中で共通して子どもたちに必ず身に付けさせたい力や態度について話し合った。その結果、児童生徒の発達段階に応じて、確実に身に付けさせたい力を「きく力」として共通理解した。

「きく力」は、学ぶ上でもコミュニケーションをしていく上でも欠かすことのできない力である。コミュニケーションの入り口という意味からも「きく力」に、焦点をあてた指導をしていきたいと考えた。「きく力」には、「聞く」、「聴く」、「訊く」があると考え、広い意味での「きく力」ととらえた。

そこで、「きき合い学ぶ合う力」とは、

①課題解決に向けて、自分の思いや考えを持ち、相手に伝える力

②身に付けた「きく力」を元にして、自分の思いや考えを広げたり深めたりできる力

とし、共通理解を図った。

②　授業構造についての研究

「きき合い学び合う授業づくり」を目指すために授業の構造に着目した。授業の前半では児童・生徒の多様な考えを引き出す場面、中盤ではお互いの意見をきき合いともに学び合う場面、終末では広がった意見が教師の意図したねらいに迫っていく場面、これらの大きく三つの場面のある授業構造を意識した授業改善を行った。この流れを生み出すことで、児童生徒は多くの視点から課題を追求し出てきた多様な意見の中からよりよいものや他との関連を見出すことができるようになると考え、それぞれの場面での発問や支援方法などの研究をすることにした。

③　授業改善の視点に基づいた授業評価

「きき合い学び合う授業づくり」を進めていくために、授業案の中に授業改善の視点を明記するようにした。授業者自身も参観者も視点が明らかになることで発問や支援方法の課題がより焦点化され、授業改善につながると考えた。

そこで、授業評価シートを活用して、参観者が共通の評価の観点で授業評価を

行い、研究協議や今後の授業づくりに生かしていくようにした。
　授業評価の観点については、以下の通りとした。

授業評価の観点

1　多様な考え方を引き出す場面での適切な支援ができたか。
2　きき合い学び合う場面での適切な支援ができたか。
3　ねらいに迫る場面での適切な支援ができたか。

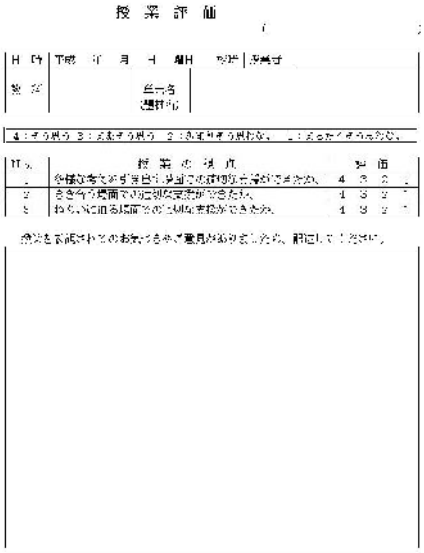
④　授業交流（授業公開と研究協議）について

　各校の子どもの実態や授業の様子をお互いに理解するとともに、授業改善を進めるために、２年次も各校で授業公開を行うこととした。１年次は授業参観のみで、研究協議に全員が参加することが難しかった。今年度は、以下のような形で授業公開と研究協議を進めることにした。

授業交流

○　各校で授業公開を開催する。
○　授業改善研究部会の部員は、授業参観及び研究協議に参加する。
○　授業研究会（研究協議等）は、部会で行う。
○　授業評価を活用する。

【　授業評価シート　】



【　研究協議会の様子　】

（３）　今年度の授業実践

○　６月　１日（水）大和中学校　１年　国語科　美術科
○　６月２９日（水）岩田小学校　３年　道徳
○　７月１１日（月）大和中学校　３年　理科
○１１月２４日（木）大和中学校　１年　社会　　２年　道徳　数学
　（研究発表会）　　岩田小学校　１年　算数　　４年　道徳
　　塩田小学校　３・４年（複式）　算数
　　東荷小学校　３・４年　音楽

２　実践事例

（１）　「聞く力」育成のための小中での具体的な取組

①　ペアやグループ、討論形式の学習形態を多く取り入れる。

・　グループ活動での話し合いの約束
・　発表している人の考えにしっかり耳を傾ける。
・　疑問や質問を積極的にする。
・　人の発表を笑ったりけなしたりしない。
・　人の意見や考えをメモする。
・　自分の考えを具体的に説明する。

②　教室に次の自己評価の項目を常掲し、授業の終わりにノートに記述する。

・　自分の考えをもつことができましたか。
・　友だちの考えに質問をしたり、意見を言ったりしましたか。
・　今日の学習がよく分かりましたか。

※　分かったこと・友だちから学んだこと・楽しかったことなどを書きましょう
よく当てはまる　◎　　当てはまる　○　　当てはまらない　△

③　聞き方のルールづくりをする。

・「あいうえお」（あいてを見て、いみを考えて、うなずきながら、えがおで、おわりまで聞く）
・「よくきく」　（よけいなことはしない、くびを縦にうなずきながら、きちんと足を揃えて、くんだ手は机の上に置き目を見て聞く）

④　聞き方、話し方の形式を決め、技術を鍛える。

＜聞き方＞

・　話す人の方をしっかりと向く。
・　うなずきながら聞く。
・　わからないことや意見があったら手をあげて発表する。
・　質問するときは、自分の考えを話してから質問する。

＜話し方＞

・　聞き手をしっかり見て、最後まで大きな声で話す。
・　順番を表す言葉やつなぎ言葉を使って話す。
・　自分の考えを先に言ってから話す。
・　図や写真、教科書の文やグラフを使って話す。

（２）　授業構造に着目した小中の授業実践例

授業改善の視点を明記し、授業前半で多様な考えを引き出し、中盤で互いの意見をきき合い学び合い、終末で教師の意図したねらいに迫る授業構造を意識した授業改善を目指した。

実践事例１　～　小学校　第３学年　道徳　～

授業改善の視点

多様な考えを引き出させるような葛藤が生じる発問を投げかけたり、ねらいにせまる発問を工夫したりすることにより、児童のコミュニケーション能力を高めることができる。

１　主題名　　思いやりを大切に＜２－（３）信頼・友情＞
　　資料名「ぜったいひみつ」（「モラルジレンマ資料と授業展開　小学校編」明治図書）

２　本時案

（１）ねらい　自分の考えと友達の考えと擦りあわせることを通して、友達の気持ちを考えて行動しようとする心情を養う。

（２）準　備　挿絵、ワークシート、短冊（学習課題）、ネームカード

（３）展　開

場面	学習活動・内容	指導上の留意点と支援　●・・・評価
多様な考えを引き出す	１　友達との秘密ごとについての経験を話し合う。 ・友達から「秘密にしてね。」と言われた経験 ・秘密を破ることについての考え	○　友達との秘密ごとについて経験を振り返ることで、本資料の話題を身近に感じられるようにする。 ○　秘密にすると約束したことを破ることはよくない、ということを確認することで、本資料で葛藤を感じやすいようにする。
	２　資料を読み、物語の状況を理解する。 ・よしえとのりこの関係 ・クラスのみんなの気持ち ・のりこの気持ち	○　場面設定の理解を深めるための発問をいくつか行い、確認する。 Ｔ　よしえさんとのりこさんは、どんな関係でしょう。 Ｔ　クラスのみんなは、どんな思いで準備しているのでしょう。 Ｔ　のりこさんは、どんな気持ちでいるでしょう。 ○　それぞれの気持ちが分かるように板書を工夫する。
／	よしえさんはのりこさんに、お別れ会のことを言うべきでしょうか、言わないべきでしょうか。	
きき合い学び合う	３　よしえはどうするべきかをワークシートに書き、話し合う。 言うべき ・のりこさんが悲しんでいるから ・のりこさんはみんなと遊びたいと思っているから 言わないべき ・クラスのみんなと約束したから ・のりこさんを喜ばせるためにやっているから ・お別れ会当日には喜んでくれるはずだから	○　葛藤場面では、ネームカードを黒板に貼って立場をはっきり示させ、全員が意見を言う場を作る。 ○　児童どうしで話し合いが進められるように、友達の発言を受けて、「○○さんの～という意見に反対です。」というように、友達の意見と絡めて発言するよう伝える。 ○　のりこさんがどのように感じているかが分かる文を探し、傍線を引かせることで、のりこさんが本当に望んでいることは何かに気付けるようにする。 ○　児童どうしの意見が活発にならない場合は、揺さぶりをかける。 ≪「言うべき」という児童に対し≫ Ｔ　約束を破ることはいいことですか。 Ｔ　秘密にしていたことを話したと知ったら、クラスの友達はどう思うでしょう。 ≪「言わないべき」という意見の児童に対して≫ Ｔ　のりこさんが悲しいままでいいのですか。 ○　出てきた意見が、それぞれ誰の気持ちを大切にしているかに注目し、相手の気持ちを尊重することの大切さに気付けるようにする。 ●　自分の立場を決めて、その理由を書き、発表することができたか。（ワークシート、発表） ●　自分の考えと比較しながら友達の発表を聞くことができたか。（観察・発表）
／	よしえさんはのりこさんに、何と答えたでしょう。	
ねら	４　よしえがのりこに何と言うことがよいのかを考えてふきだしに表し、話し合う。 ・のりこの思いとクラスのみんなの思いを尊重した方法	○　今のままではよくないことを全員で確認した上で、どのように答えることがよいのかを考え、ワークシートに書かせる。 ○　最終的に、のりことクラスのみんなの両方の気持ちを考えることが大切であることに気付けるようにする。

いに迫る			

3　考　察

（1）　多様な考えを引き出す場面での適切な支援

①　多様な意見を引き出す資料を選ぶ。

今回はモラルジレンマ資料を用いた。どちらか迷う場面を作ることで、様々な理由が出てきたので、このような資料は、話し合いをするにはとても効果的な資料であると改めて感じた。

②　自分の立場を決めさせる。

自分の立場をはっきりさせることで、どの児童もまずは自分の考えを持つことができた。ただ、どうしても決めきれない児童も二名いた。どちらの意見にも決められない児童がいたら、なぜ迷っているかも言えるようにしていくことが大切である。どうしても言えなければ、友達の発言の中のどの考えに近いかだけでも言わせるようにしたい。

（2）　きき合い学び合う場面での適切な支援

①　机をコの字型に並べる。

コの字型の机のならべ方は、教師や友達の顔がよく見えるので、「相手を見て話す・聞く」を意識できてよかった。

②　ネームプレートを立場ごとに黒板に貼る。

自分の選んだ立場ごとにネームプレートを貼らせるのは、友達がどんな考えを持っているかがよく分かるので、話し合うのに適している。

③　友達の発表を聞くときの約束を具体的に決め、児童に常に意識させる。

「話し方名人」という具体的な５つの約束事を、授業の中の様々な場面で合い言葉のようにして言わせていることで、児童が少しずつそれらを意識できるようになってきている。何に気を付けて聞いたらよいかを具体的に示すことと、それをいつも意識させ、教師が賞賛することが大切であると分かった。

（3）　ねらいにせまる場面での適切な支援

今回は、児童が友達の意見に共感することは多くあったが、反対意見は出なかった。けれどそれぞれの思いに違いがあるはずなので、そこの部分を教師がもっと引き出せるとよかった。

4　今後の課題

（1）　児童どうしでの意見のやりとりをできるようにする。

今回は、友達に対する疑問・反論意見が出なかった。児童から意見が出にくい場合は、教師が揺さぶりをかけたり、方法を変えて話し合わせるとよい。例えば、①小グループで話し合いをさせる。②意見の違いで赤白帽子の色をかえてかぶらせ、話し合いをさせるなどである。

（2）　「ねらいにせまる場面での適切な支援」を様々な方法で行う。

今回は、児童から思いを引き出すことはできても、その思いどうしを擦りあわせることができなかったことが、一番の反省点である。それを改善するために、具体的に次のような方法が考えられる。

①　ふきだしに書かせた後の発表は、ロールプレイ形式にすると、実際の場面に近くなりよい。

②　子どもの鋭い角度からのつぶやきがあればそれを取り上げると、考えがより深まっていく。

③　立場が変わるときは、なぜか、理由をしっかり言わせる。

④　子どもの意見を分類し、意図的に発表させる。

⑤　最後の大きな発問は、教師が説話で話したいことが、子どもから出てくるようなものにする。

実践事例２　～　中学校　第１学年国語科　～

授業改善の視点

同じ題材で詩を書き、グループで互いに評価しあったり、協力して１つの作品を作ったりすることによって、生徒のコミュニケーション能力を高めることができる。

１　単元名　　あなたも詩人

２　目 標　　自由な発想で短い詩を作り、発表する。

３　指導計画

（ 第一次　　「名付けられた葉」で学習したことを生かして、四行詩を書く。　1/2 時間 ）（４月末）

第二次　　四行詩をグループで交換して評価しあい、友達の意見を自分の表現の参考にして、新しい四行詩を書く。　１時間

第三次　　詩人が書いた短い詩を読んで自由な発想と表現の工夫の重要性に気付き、友達と意見交換をしながら推敲し作品を仕上げる。　１時間（本時）

４　本時案

（１）　主眼　　友達と意見を交換しながら、発想豊かで表現を工夫した四行詩を作る。

（２）　準備　　学習プリント　　教科書

（３）　展開

場面	学習活動・内容	指導上の留意点と支援　　●・・・評価
多様な考えを引き出す／きき合い学び合う／ねらいに迫る	１ 詩が書かれた学習プリントを読む。	○ 山村暮鳥「風景 純銀もざいく」、八木重吉「果物」、三好達治「土」、吉野弘「静」、まどみちお「きりんはきりん」、金子みすゞ「積もった雪」 ジャン・コクトー（堀口大学・訳）「耳」 黒田三郎「紙ふうせん」など　短い詩を扱う。
	「自由な発想」と「表現の工夫」がよい詩を作るには必要であることを理解し、お互いの作品を評価し合い友達の意見を取り入れて、よりよい四行詩を作ってみよう。	
	２ 詩を作るときに大切なことを考える。	○「プリントの詩を読んで、おもしろいなあ、素敵だなあと思ったところを発表しましょう。」 ○たくさん意見を出させ、「発想」に関することと「表現方法」に関することに分けて、その２つが大切なことをおさえる。
	３ グループになって、お互いの作品を読み合い、意見を述べあう。	○「友達の詩を読んで、よいところ、もう少し工夫したらよいところを伝えてあげましょう。」 ○先ず一人ひとりの詩を読んで、相手に伝えることを書かせておく。全員のを読み終えたら、進行係の指示のもと、話し合いに入らせる。 ●自分の詩に対する意見を、メモをとりながら聞いているか。
	４　一つの詩を取り上げて、みんなでよりよい四行詩に作り直す。	○どの詩にするか決まった段階で、推敲前の状態の詩を板書し始める。
	グループの中から１編を選び、みんなで話し合ってよりよい詩に作り直しましょう。	
		●積極的に意見を出しているか。
	５　できた詩をみんなの前で発表する。	●みんなに伝わるような声の大きさ・速度で発表できているか。 ●推敲前の作品と比べながら聞いているか。 ●推敲前より、発想豊かで表現の工夫がみられる詩になっているか。

5　考察

授業後の研究協議は、参観者が２グループに分かれてのワークショップ形式で実施し、以下の３つの視点を中心に協議した。そのときに出た意見をもとに、本授業を考察する。

（１）「多様な意見を引き出す場面での適切な支援ができていたか」

（詩を読んで、良い詩に必要な要素（「自由な発想」「表現の工夫」）を見つける場面
　同じ題材を基にして、自分の感性・表現方法で自由に詩を作る場面）

例として出された１０編の詩の選定がよく、それらの詩に対する生徒の驚きや感動をしっかりと取り上げ、詩のおもしろさを生徒が感じることができていた。推敲後の作品の中には、例示の詩に使われていた反復法や脚韻、対句などの技法も取り入れられており、あとの学習に役立っていた。ただし、生徒から意見がなかなか出ず、この場面に時間がかかりすぎて授業の後半部分の時間が足りなかった。作品数をもっと絞ってもよかった。

同じ題材で詩を書かせたことで、ものの見方・感じ方の多様性を感じることができていた。今まで自分が気づかなかったことに目を向けている友達の作品に対する、素直な感動が見られた。

（２）「きき合い学び合う場面での適切な支援ができていたか」

（ グループで友達の作品を読み合い、意見交換をする場面）

決められた時間内（一作品１分３０秒）で、友達の作品を読み、感想をまとめるという作業が手早くできていた。その後の意見交換は、進行係がリーダーとなってスムーズにすすめられていた。普段からこのような活動を授業に取り入れている成果がでたと思われる。友達の意見を良く聞き、メモを取りながら聞いていた。

（３）「ねらいにせまる場面での適切な支援ができていたか」

（ みんなの意見をまとめて、一つの作品を推敲し、よりよい作品に仕上げる場面）

どの作品を推敲するのか、その作品選びに時間がかかってしまったが、決まってからは一人一人が真剣に考え、意見を述べていた。一つのフレーズや言葉にこだわりをもち、班内から出されたどの表現を使うかという話し合いで盛り上がり、時間はかかったが各班とも仕上げることができ、みんなの思考を、一つの作品に集中させることができた。

推敲できた作品を、代表者が発表した。時間が足りなかったせいもあるが、できた詩を読むだけで終わってしまい、作品の推敲の根拠も発表するとよかったという反省があがった。推敲したことによってどのようなところがよくなったのか、説明ができていなかった。

6　今後の課題

「きく」活動は、やはり伝え合うことが中心で、グループ活動やペア学習が効果的である。グループ学習をうまく成立させるには、相手を尊重する態度の育成、役割分担を含めてルールや約束事の徹底、「話す」「聞く」技能の習得等が大切で一朝一夕には身に付かない要素が必要となり、継続して授業に取り入れていきたいと考える。今回の授業では生徒は「きく」ことは概ねできていたが、今後はただ「きく」だけでなく、「きき合い学び合う」ことができる学習集団を目指していきたいと思う。

３　取組の成果と課題

（１）　成果

①　教職員の課題意識・連携意識の高まり

小学校が中学校、中学校が小学校の授業をお互いに参観することで、子どもの実態や指導方法の違いなどについて理解が深まり円滑に連携を進める上での課題意識が高まった。また、授業後に５校の教員が集まって研究協議会を行い、共通のねらいに向かって話し合ったり、小学校間でお互いの授業を参観したりすることで、連携がより深まった。

②　授業改善への意識の高まり

「授業改善の視点」を明確にすることで、その視点を踏まえて日常の授業について振り返ることができ、授業の流れや支援等について授業改善に生かすことができるようになった。

③　児童・生徒の変容

各校で、児童・生徒にも分かるような「合い言葉」や教室掲示等を工夫したり、ペア学習やグループ学習を取り入れたりするなど、「きき方」「話し方」の基本的な力を身に付ける指導を継続化することで、「きく」姿勢が身に付き意識が高まってきた。また、「きいてもらえる」から「話せる」という学級の受容的な雰囲気ができ、コミュニケーション能力の向上につながってきた。

（２）　課題

①　授業構造を意識した授業改善について

「きき合い学び合う授業づくり」を目指すために、授業の構造に着目し、大きく三つの場面を意識した授業改善について研究を進めてきたが、実際の授業では、なかなか思うような流れになっていないことが多い。児童・生徒の実態、小・中の指導法、教科の特性等、様々な違いから、この授業構造に沿った授業を進めることは難しい面もあるが、コミュニケーション能力を向上させる上で大変有効な手立てだと思われる。今後も研究を進め、適切な支援の方法等をさぐりながら、授業構造を意識した授業改善を行っていきたい。

②　子どもの見取り方について

「きき合い学び合う力」については、実際の子どもの姿だけで評価することは難しい。また、子どもの表情や発言から見取るだけでは、十分とは言えない。振り返りシートなどを活用した振り返りの時間を設け、子どもの学習の見取りを行い価値づけることで、次の学習への意欲化につなげていきたい。

③　９年間で育てたい「きく力」について

小中学校の共通した児童・生徒の課題である「きく力」の育成について、各校で実態に合わせて取り組むことにした。しかし、９年間を通して育てたい「きく力」の具体的な姿を共通理解することで、もっと、授業改善が図られるのではないかと思われる。今後、発達段階に応じた具体的な「きく力」について、小中で共通理解するとともに、子どもたちにも具体的な姿を示すことで、継続的に指導を行っていきたい。

３　コミュニケーション能力を育む
外国語活動・外国語科連携研究部会

1　研究の取組

（1）　部会のねらいと期待される成果

ねらい

外国語に親しみをもち、外国語を使ってだれとでも進んでコミュニケーションを図ろうとする意欲・態度をもった児童生徒を育成する。

期待される成果

・　誰とでも進んでコミュニケーションを図ることができる。

（2）　ねらい達成の方途

①　研究の方向性

大和地域では４つの小学校が１つの中学校に進学する。しかし、これまでは互いに体系的、連続的な情報交換が行われていなかったため、中学校に入学してからの外国語科の授業場面で積極的な学習への参加が阻害され、新たなクラスメートとのコミュニケーションに臆病になってしまう場面が見られた。

そこで、４小学校の外国語活動の教育内容を均質化し、中学校入学段階で足並みをそろえて外国語科の学習を開始しできるようにするため、また，小学校でのコミュニケーションに関わる授業の工夫を中学校でも取り入れ、小学校４校での外国語活動が中学校での外国語科の学習にスムーズにつながるようにするため以下の研究に取り組んだ。

②　研究内容と方法

ア　小中の連携を考えた年間指導計画の作成と活用

○　中（小）学校との関連を記入した小学校外国語活動の年間指導計画（中学校のシラバス）の作成

○　年間指導計画を生かした授業設計

イ　中学校と小学校４校で共有できるデジタルデータの作成と活用

○　電子黒板対応のデジタルデータ・ピクチャーカードの作成

○　デジタルカード・ピクチャーカードの効果的な活用

ウ　児童・生徒が進んでコミュニケーションを図ろうとする授業の工夫

○　教材の工夫

○　アクティビティの工夫

③　評価による検証

ァ　プロセス評価（取組は計画通りに行われているか）の実施

イ　アウトカム評価（目標は達成できたか）の実施

2　実践事例

（1）小中の連携を考えた年間指導計画の作成と活用

小学校では年間計画に中学校の学習へのつながりが、中学校では小学校での既習事項がわかるものをそれぞれ作成した。これにより、小学校で学ぶ表現は中学校１年生の前期に集中していることが分かり、特に小学校と中学１年生の連携の大切さを再確認した。また、小学校４校が同じ年間計画を使用することにより、４校の教育内容の均質化が図られた。

（2）中学校と小学校４校で共有できるデジタルデータの作成と活用

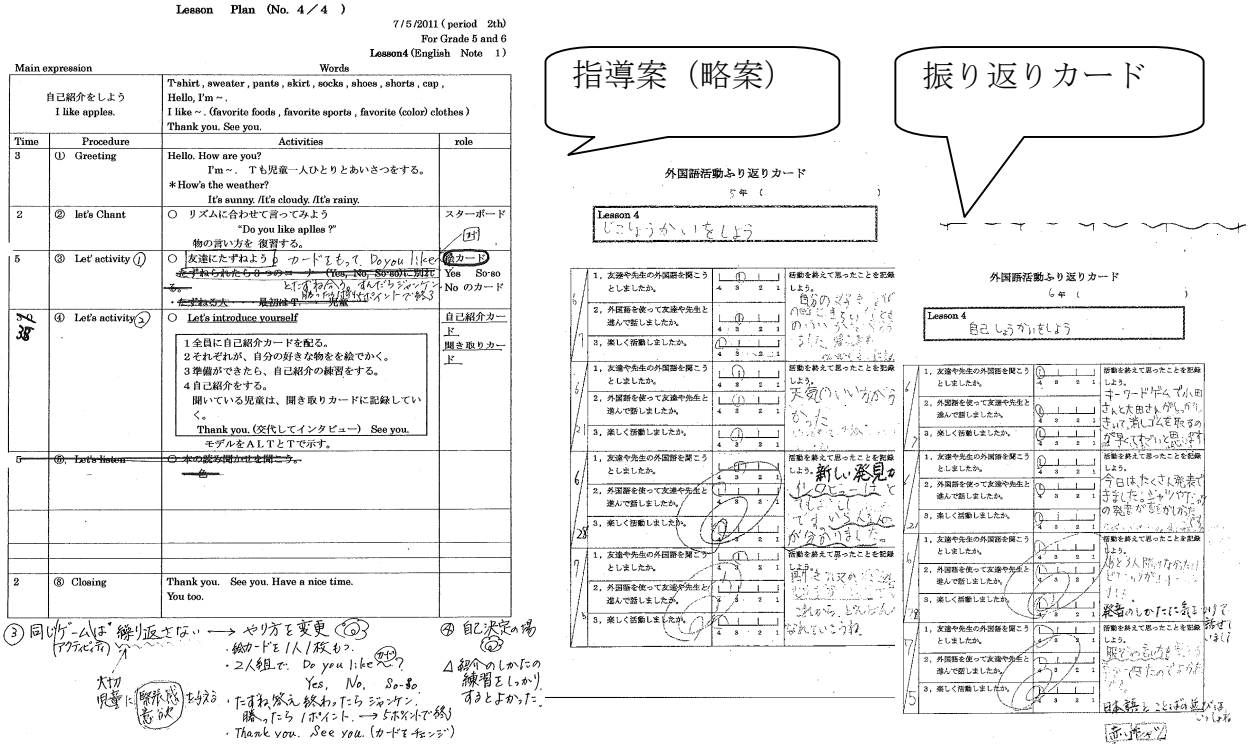
夏季休業中に２回研修会を持ち、小・中の教員が共同でデジタルデータを作成した。ＡＬＴを指導者に招き、電子黒板活用の基礎を学んだ後、グループに分かれて種類の違うデジタル教材を作成した。１校では多くの教材は作れないが５校で分担することにより短時間で複数の教材の作成が可能になった。これまでに作成していたデジタル教材も加えてＤＶＤを作成し５校で共有している。

（3）　児童・生徒が進んでコミュニケーションを図ろうとする授業の工夫

①　小学校での取組

ア　日々の授業実践と授業評価

授業の略案に、アクティビティ、教材の工夫を記入するともに、授業後には反省や気付きを記入し、次時に生かすようにした。また，児童・生徒が記入する振り返りカードも，児童の意欲や態度を見取る資料として活用した。



イ　２つの小学校での交流授業

第５学年　外国語活動指導案

指導者　　Ｔ１　西村　俊彦
　　Ｔ２　角田　真由美
　　ＡＬＴ　フィリップ・ヴォタノ

１　単元名　Ｌｅｓｓｏｎ３　数で遊ぼう

２　目　標

○世界の数の数え方や遊びに興味をもち、英語の音声やリズムに慣れる。
○数を数えたり聞いたりする活動やゲームを通して、積極的に数を尋ねたり答えたりする。
○ほかの学校の友だちとも進んでコミュニケーションをとり、仲よく活動する。

３　単元について

岩田小学校５年生は、男子１８人女子１２人のクラスで、東荷小学校５年生は男子５人女子１人のクラスである。両校ともに陽気で明るく、活動的な児童が多い。日頃の生活の中でも、積極的に他者との交流を図ろうとする児童が多く見られる。ただ、相手への配慮が足りなかったり、不容易な一言を言ってしまったりすることで、トラブルを起こしてしまうこともある。自分を省み、他者の心情を慮ることの大切さを、全教育活動を通じて学ばせたいところである。外国語活動に関しては、多くの児童は、大いに楽しみながら活動している。外国語を使いながらのゲームが大好きで、夢中になって取り組んでいる。しかし、「誰とでも積極的に交流する」ことや「失敗を恐れず、恥ずかしがらない」ことなどが課題として残る。今回、合同で外国語が活動に取り組むが、宿泊学習や社会見学、修学旅行などと合わせて、楽しみながら親交を深めていき、中学校でもよりよい交流が持続することをねらう。

本単元は、これからの活動で繰り返し使われる数のうち、入門期として１～２０の数を主に取り上げる。数の取り上げ方を様々に用意し、歌、ゲーム、日常生活や算数授業などの一場面等、必然的に数を扱う場面を設定すれば、数に関する英語の発音を聞くことも発音することも多くなり、数に関する英語に慣れ親しむことになるだろう。また、数を数える際に様々な国の数え方にもふれる場面も設定できるので、日本との相違点も体感できるだろう。「数字ゲーム」「すごろくゲーム」「算数ゲーム」などを取り入れる予定であるので、友達との関わりが自然と生まれやすく、コミュニケーションを取り合う場面となり、「英語を通してコミュニケーション能力の素地を培う」という趣旨に迫っていきやすい単元となるであろう。

指導にあたっては、以下の点に留意したい。

○　必然的に、何度も数を言ったり　数を尋ねたり答えたりする場面が生まれるように、ゲームや活動を仕組んでいきたい。
○「二人で問題づくり」「「グループで英語カルタゲーム」「グループで対戦ゲーム」など、友達との楽しい関わりが自然と生まれるような活動を選んでいきたい。
○　ALT と教師とのコミュニケーションの例や、児童同士の活動例などが、十分見られる場面を設定し、「自分たちにもできる」と、自信をもって活動や発音に取り組めるようにしていく。
○　日頃の生活のなかでも「英語で言ってみよう」という意欲がわくことをねらい、日常生活で数字を使う場面や、算数学習に関する場面などを意図的に取り上げたい。
○　Multiple Intelligences Theory　（ハーバード大学のハワードガードナー氏）の考え方を取り入れ、外国語活動の中でも音楽や算数、理科、体育などの様々な分野との関連を図り、各分野の能力育成につながることをねらいたい。同時に、他分野の中で英語を活用する意識を高めることにつなげたい。
○　指導者やＡＬＴがお互いに意図的に間違えたり、指摘し合ったりする場面を児童の前で見せることで、国によって表現の仕方がちがうことをクローズアップし、印象に残りやすくしていきたい。

４　評価規準

言語や文化への理解	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度	外国語の音声や基本的な表現に親しむこと
・日本と外国の数の数え方や、遊びの違いなどを知る。〈英語ノート・振り返りカード・行動観察〉 ・海外の国々の数の言い方や数え方、遊び方などを知ることで文化の多様性への認識を深める。〈英語ノート・振り返りカード・行動観察〉	・１～２０までの数を聞いたり言ったりしながら、積極的にゲームに参加している。〈行動観察・発言〉 ・友達に積極的に数を尋ねたり、答えたりしている。〈行動観察・発言〉	・数を数えたり聞いたりする活動を通して、英語の発音やリズムなどに慣れ親しもうとしている。〈行動観察・発言・振り返りカード〉

6　本時　　本時(４／４時)

○本時のねらい　　１～２０の数字を使ったゲームや歌などで楽しむ中で、様々な国の数え方や英語の１～２０の言い方に慣れ親しむ

○準備物　　The　Slap　Game 用のカード　自己紹介用名刺カード

○展開

時間	学習活動・内容	指導上の留意点 ●・・評価 担任(T1,T2)	ALT	教材・教具
5	1　あいさつ・自己紹介をする。 Hello, everyone.　How are you? ☆ Change　自己紹介	○ローマ字で書いた自己紹介カード(一人１枚)を使い、他校の児童、男女等が交流できるような形で自己紹介させる。 ○交換した相手になりきって次々に自己紹介させる。	○ HRT と一緒に Change 自己紹介のやり方を見せる。	自己紹介カード
	英語の１～２０をどんどん使って楽しもう。			
5	2　歌♪“The Number Rock” (1) ALT の後について言う練習をする。 (2) CD に合わせて歌う。 (3) CD に合わせて、担任の指示に従い、手をたたきながら歌う。 ・１～２０までの数	○歌う前に、黒板に数字カードを貼る。 ○歌に合わせて数字カードを指し棒で指すことで、どの数字を言っているのか分かりやすいようにする。 ○楽器を演奏することで、雰囲気を盛り上げる	○１１～２０までの発音の仕方を確認させる。 ○“The Number Rock”を紹介する。	数字カード ＣＤ
10	3　The　Bomb ゲームをする。 ・１～２０までの数を一人３つまで言いながら回していく。２０を言った人が負け。	○ T1 と T2、ALT がゲームのやり方をやってみせる。 ○６つのグループに分かれてゲームに親しむ。	○ゲームのやり方を確認させる。	
10	4　各国の数え方(集計の仕方) ・　韓国や中国、アメリカでの数え方 ・　アメリカで５ずつの記録の仕方	○ ALT に日本風の数え方のやり方を説明する中で、児童にも確認させる。 ○アメリカ風の数え方を児童にも体験させる。 ○意図的に日本風の言葉で説明する途中でＡＬＴに指摘してもらい、英語での言い方を印象づける。	○日本風の数え方に挑戦し、意図的に間違える。 ○アメリカ風の数え方を紹介する。 ○英語で言わせたい部分を指摘し、「英語ではこう言う。」ということを印象づける。	スマートボード
10	5　The Slap Game(算数カルタゲーム)を行う。 ・英語での計算の言い方 ・その答えになる計算式をさがす	○再び６つのグループに分かれさせる。 ○足し算や引き算、かけ算などに、英語で取り組むことを提案する。 ○ゲームのやり方を T1、T2、ALT がやってみせる。(スマートボード上で) ○取り組みやすくするために、「足し算」でのゲーム、次に「引き算」そして「かけ算」というように進める。 ●積極的に会話を交わし、楽しくゲームに参加している。 (行動観察)	○足し算や引き算などを英語ではどう言いながら進めるのかを教え、その中で、何度も数の発音を練習させる。	計算カード６グループ分
5	6　本時の活動を振り返り、振り返りカードに感想を書く。			

○授業の考察

・教材の工夫

ここでは、自己紹介カード、数字カード、計算式カードを活用した。そして英語を使って計算をしたり、音楽に合わせて歌ったりと、英語での活動に他の教科の学習を入れ込むことで児童は興味を持ち続け活動していた。また、自己紹介カードや計算式カードなど準備物があったことでも活動への意欲が高まった。

・アクティビティの工夫

２人組やグループでの活動を多く仕組み、自然で楽しい雰囲気の中でコミュニケーションを図る場面を作ることができた。今回は、２つの小学校の交流授業だったが、カードを交換する場面があったため、他校の児童とも進んでかかわることができた。また、bom ゲームや答えに合う計算式を見つけるゲームでは、既習の学習を生かし競争するという知的好奇心を揺さぶり意欲を高めることができた。

課題としては、もっとコミュニケーションの場面をふやすことができたのではないかということがあげられる。本時は、単元の４／４時であったが、アクティビティは「聞いて考えてカードを取る」というものであった。単元のまとめの時間としては、１時から身に付けてきた数字の言い方を使って十分コミュニケーション活動ができたと考えられる。

・小学校交流授業への取組

他校の児童と一緒にコミュニケーション主体の授業をすることで、相手を「知りたい」「尋ねてみたい」という気持ちが高まったと思われる。また、教師同士も互いに連絡を取り合い、話し合いながら１つの授業を作っていく過程で、児童理解が深まり、新たな指導の工夫も生まれた。さらに、授業において教師２人とＡＬＴが間違える姿を見せながら楽しくコミュニケーションを取り合う姿が、児童の学習の仕方のよきモデルとなっていた。

・児童による授業評価

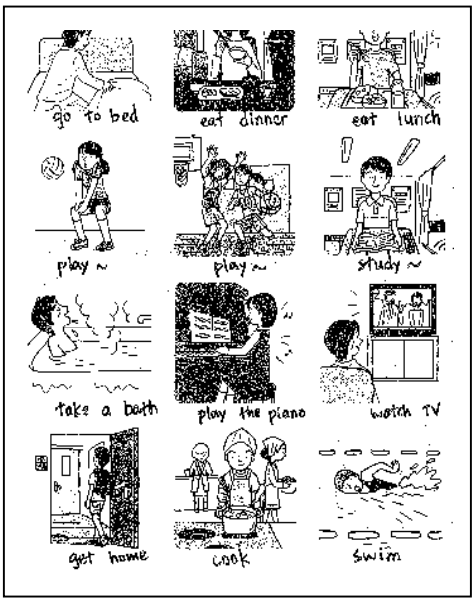
「楽しく活動したか」の質問では100％の児童が「よくできた」と回答した。また、「相手の英語を聞こうとした」も「よくできた」「できた」を合わせると 100％であった。「進んで英語で話した」児童は 90％にのぼり、さまざまな授業の工夫の成果が児童のコミュニケーション活動を活発にしたといえよう。

② 中学校での取組

ア 小学校外国語活動の授業参観

小学校での外国語活動を参観すると、中学校教員が思っている以上に、小学生がいろいろな英語表現を使って活動し、クラスルームイングリッシュに慣れ親しんでいることが分かった。また、ALT によっては、中学１年生ではまだ習わない英語表現を日常的に使っている場合もあった。小学校の授業を参観することで、中学校での英語授業を組み立てる際、外国語活動で慣れ親しんだ表現を引き続き授業の中で使用したり、今までは日本語を使用していた場面で英語を使って指示や質問をしたりするなど、中学校での授業づくりにおいて工夫が生まれるようになった。

イ 「英語ノート」の活用



小学校外国語活動で使用している「英語ノート１・２」の内容を見ると、中学校１年生で習う新出表現や活動内容と重なる部分が多くある。また、ABC ソングなど、出版社によっては、中学校の教科書に載っているメロディと英語ノートに載っているものが違うことにも気づく。そこで、新出表現導入の際に小学校で行ったゲームをウォーミンアップとして取り入れたり、英語ノートにある絵に英単語の文字を書き加えたものを資料として配布したり、中学校の教科書にある内容を小学校で慣れ親しんだ内容に変えて練習したりした。外国語活動で一度やったことのあるアクティビティは生徒の反応もよく、コミュニケーション活動にも意欲的に取り組んでいた。

ウ 電子黒板の使用

電子黒板を使用することで、文字と音との関係が生徒にとって理解しやすくなったといえる。また、新出表現の文法説明の際やパターンプラクティスなどにおいて、小学校で行った活動を取り入れたり、文字や絵を見ながら短い時間でより多くの口頭練習をしたりすることで、生徒の学力の定着を図ることができた。

（指導案例）　　第３学年　英語科学習指導案

1　単元名　Sunshine English Course 3　Program 2　On the Web

2　目　標　「It is･･･for - to ~」を用いて、学校生活について説明ができる。

3　本時案

学習内容・活動	教師の対応（支援）	評価の観点・方法
①　前時の復習をする。 ＜本文の音読練習＞ ・一斉 ・ペア活動 ＜文法の復習＞ Have you ever been to ~ ? Yes. I've been to ~ once. No. I've never been to ~.	・大きな声で、スムーズに　言えるようになるまで、いろいろな練習方法で読ませたい。 ・見せる→隠す、一斉→個人など、何度も繰り返し練習して、自信もって言えるようにしてから、ペア活動に移る。 **スマートボードを活用した写真や例文の提示** 	◇　内容をよく理解して、本文を読むことができたか。 （観察・発表） 【関心・意欲】 ◇　まちがいを恐れず、積極的に英語を使おうとしているか。（発表） 【関心・意欲】 ◇　次のインタビュー活動につながるように、自信をもって言えるように練習したか。
②　「～することは・・・である」という表現を学習する。 ③「It's~ for~ to~.」を使った文の音読練習をする。	・ノートに写す時間を区切って与え、音読練習の時には、顔を上げて言うように促す。 ・リズムよく言えるまで音読練習を繰り返す。	
自分にとって難しいこと（楽しいこと、簡単なこと）を友達に伝えよう。　（Interview Game）		
④　Interview の方法を確認し、友達にインタビューし、できるだけ多くの友達の情報を集める。	・ゲームの前に、反復練習し、できるだけ相手を見て、インタビューできるようにする。 ・英語を聞き取ろうとする、英語を相手に伝えようとする気持ちが大切であることを知らせる。 **担任自作のイラストを活用したペア活動プリント**	【関心・意欲】 ◇　積極的に友達にインタビューし、会話を楽しむこができたか。 （観察法）
⑤　インタビューの結果わかったことを英語で表現する。 ⑥　基礎徹底プリントをする。	・for の後ろに名前がくることをおさえる。 ・さらに、基本文３つを暗唱させて、定着を図りたい。	【表現】 ◇[It~ for~ to~.] の構文を使って、友達にとって難しいことや楽しいことを英語で表現できたか。（ワークシート）

（4）プロセス評価

年間指導計画の作成及びデジタルデータの作成については、小中合同の研修会で進捗状況を確認しながら取り組むことができた。授業の工夫については、各学校で実践することになるため、進捗状況の把握が難しかったが、小学校では指導案（略案）と児童の振り返りカードを元に評価を行った。また、中学校では、生徒の振り返りカードを参考にするとともに、授業参観等で小学校に来校し、進捗状況を確認しあった。

3　取組の成果と課題

（1）　成果

①　楽しく活動し，英語に親しみを持つことができた。

ゲームを取り入れたり，デジタルデータを活用したりしながら毎時間の授業を工夫した結果，小学校では，楽しいと感じている児童の割合が大変高い。中学校では，教科となり「読む」「書く」が加わるため「難しくなった」と感じる生徒も多いと思われる。しかし，学年間の差はあるが，楽しいと感じている生徒は比較的多く，英語へ親しみを持って学習している様子が伺える。（資料；評価項目 A 参照）

また、小・中学校とも、授業以外でも、英語で挨拶をしたり、覚えた英語を使ったりする場面も多く見られるようになってきている。

②　英語を使ってコミュニケーションをとろうとする意欲・態度が向上した。

児童・生徒とも「相手が英語で話すことが分かりたい。」という意欲が高い。（資料；評価項目 C 参照）これは、相手理解がコミュニケーションの第一歩であるということを授業の中で体験的に学んできたからであろう。

また、「初めて会った人とでも、英語で挨拶したい。質問に答えたい。」と考えている児童･生徒の割合も高く、学んだ英語の力を実際の場面で使ってみたいという意欲が高まっている。（資料；評価項目 E・F 参照）

（2）課題

①　積極的に話そうとする意欲の向上を目指す。

児童・生徒の自己評価結果では、「はずかしがらずに英語を話すことができる。」という項目の評価が他に比べ低くなっている。（資料；評価項目 B 参照）特に中学校では、発達段階的にも他者意識が強まる時期だけに，間違えることをはずかしがるのだと考えられる。学級での人間関係づくりをさらに進め，積極的に話そうとする態度を育てていきたい。

②　苦手意識を持っている児童・生徒への指導を工夫する。

自己評価カードを個別に見ると，どの項目にも低い評価を記入している児童・生徒がいる。様々な工夫を行ってきてはいるが、苦手意識をもっている児童・生徒がいることも事実である。また，中学校では学年によって意欲等に差が見られる。

苦手意識を持っている児童・生徒に対して、つまずきへの対応等を含め、コミュニケーションを楽しく図れるような手立てを授業の中に取り入れていく必要がある。

〈アウトカム評価資料〉

外国語活動・外国語科自己評価カード

評価 / 項目	これまでの授業をふりかえって、自分に当てはまる数字に○をつけましょう。 4;とてもそう思う　3;そう思う　2;あまり思わない　1;思わない	
A	英語を使って活動することは楽しい。	4・3・2・1
B	はずかしがらずに英語で話すことができる。	4・3・2・1
C	相手が英語で話すことを分かりたい。	4・3・2・1
D	英語で相手に自分のことを話したい。	4・3・2・1
E	初めて合った人から英語であいさつをされました。 あなたは英語であいさつを返しますか。	4・3・2・1
F	初めてあった人から英語で質問されました。 質問の意味が分かったら英語で答えようとしますか。	4・3・2・1

外国語活動・外国語科自己評価カード集計結果（平成23年9月上旬実施）

学年	小学5年 (%)				小学6年 (%)				中学1年 (%)				中学2年 (%)				中学3年 (%)			
評価 / 項目	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
A	70	25	5	0	55	38	7	0	22	49	22	7	20	28	30	22	22	52	20	6
B	25	50	23	2	7	55	28	10	9	31	50	10	16	16	39	29	14	40	34	12
C	76	22	2	0	66	28	3	3	47	43	7	3	35	29	20	16	55	34	8	3
D	51	39	10	0	31	48	17	3	22	41	28	9	20	22	29	29	32	34	29	5
E	51	34	13	2	52	38	7	3	26	48	21	5	27	29	23	21	41	40	14	5
F	58	28	10	3	52	34	10	3	38	41	19	2	35	32	18	14	55	31	9	5

４　豊かな人間関係を育む
交 流 学 習 推 進 部 会

1　研究の取組

（１）　部会のねらいと期待される成果

ねらい

小学生と中学生が共に学び合う交流学習を実施することにより、豊かな人間関係を構築する。

期待される成果

・小学生には中学生に憧れを抱かせ、がんばろうとする態度を育てる。
・中学生には自己有用感を味わわせるとともに、思いやりの心を育てる。

（２）　ねらい達成の方途

小学生・中学生共に成果を上げることができた小・中ふれあい交流学習を、昨年度の反省をもとに、より充実させる。また、今年度は、小・中の滑らかな接続を図るため、小学６年生と中学生との交流学習に力を入れる。

①　小・中ふれあい交流学習

ア　ねらい　　進んでコミュニケーションをとり、児童生徒の交流を深める。中学生にリーダーとしての自覚と責任感を培う。

イ　日時・内容

・10 月 11 日　　小学校に中学生が出向き、中学生一人ひとりのよさを生かした小学生との交流学習を実施する。

②　小・中交流授業

ア　ねらい　　進んでコミュニケーションをとり、思いやりをもった児童生徒を育成する。また、小学６年生が中学校入学の不安を解消することにより、滑らかな接続を図る。

イ　日時・内容

・ 6 月　1 日　　体育的な活動を通しての交流授業
・11 月　4 日　　合唱を通しての交流授業①
・11 月 24 日　　合唱を通しての交流授業②

③　中学校教員による出前授業

ア　ねらい　　中学校の学習への興味をもたせ、不安感を軽減する。

イ　日時・内容

・２月下旬　　小学校（４校）で中学校教員が６年生に授業を行う。

④　中学校一日体験入学

ア　ねらい　　中学校生活の様子や雰囲気を実際に体験することで、中学校入学への期待，希望を抱かせる機会とする。

イ　日時・内容

・ 3 月 22 日　　中学校の校舎見学、レクレーション、給食、部活動体験による交流等を行う。

２　　実践事例

（１）　小中交流授業

保　健　体　育　科　　学　習　指　導　案

平成２３年　６月２１日（火）５校時・６校時

５校時　３年Ａ組（男子１４名･女子１９名）岩田･塩田小６年（男子　９名･女子１７名）

６校時　３年Ｂ組（男子１４名･女子２０名）三輪･東荷小６年（男子１０名･女子１６名）

指導者　　河内典幸　　太田　寛　　戸田弘代

1　題材名　　体つくり運動（巧みな動きを高める運動）

2　ねらい

(1) 体つくり運動は、日常生活の中でどこでも気軽に行うことができる運動である。一人から、集団での活動を通じ、運動の楽しさを味わうことができるようにする。

(2) タイミングよく動く、リズミカルに動く、素早く動くなどの巧みな動きを高めるとともに、集団でのゲームを通して、仲間との交流を深め、チームワークを身につけさせたい。

3　指導の立場

○（児童・生徒観）

中学３年生は、最高学年になり、意欲的に取り組もうとしている生徒が多い反面、行動・態度面でルーズな生徒が若干いる。小学生から見た中学校は、先輩が恐ろしい、先生が厳しいなどマイナスのイメージがあると思われるが、それを取り除くように仕組んでいくことが大切である。

○（教材観）

体つくり運動は、日常生活の中でどこでも何人でも気軽に行うことができる。そして、体つくり運動の中でも今回取り扱う巧みな動きを高める運動は、筋力や持久力、柔軟性などと違い、繰り返し練習することで、誰でもできるようになる可能性がある運動である。すぐにはできなくても、ゆっくりや簡単なことから始めることで全員ができるようになる達成感を味わうことができる教材であるといえる。

○（指導観）

ゆっくりした動きから素早い動き、易しい動きから難しい動きへの運動を小中学生が協力して取り組む中で、技ができる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるように仕組んでいきたい。また、交流を通して、小学生に中学校への安心感を与え、スムーズに中学校に入学できる雰囲気づくりにつなげていきたい。

4　授業改善の視点

初対面の中でリラックスできるようにアイスブレイキングの手法を取り入れるとともに仲間と協力することで達成感をもてる動きづくりを仕組む。

5　本時案

(1)　主　眼

・小中学生が協力し活動する中で、技ができる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるようになる。

・小学生に中学校への安心感を与え、スムーズに中学校に入学できる雰囲気づくりにつなげていく。

(2)　準　備　　デジタルタイマー・縄跳び・学習カード・筆記用具

(3)　展　開

時間	学習内容・活動	指導上の留意点と支援
5分	①小中学生それぞれが4列横隊に整列し挨拶をする。 ②中学生が移動し前後交互に８列横隊になる。	・見学者、体調等の把握をする。 ・ｱｲｽﾌﾞﾚｲｸを兼ねﾊｲﾀｯﾁをしながら移動させる。
7分	③ｽﾄﾚｯﾁ体操・筋ﾄﾚ(腕立て15回､上体起こし15回) ・しっかりと準備運動をする。 ④本時の学習内容を知る。	・中学校で行っている準備運動をさせる。 ・本時の学習内容をわかりやすく説明し､学習内容とめあてを理解させる。
5分	⑤１人でできる動きにチャレンジする。 ・耳と鼻の交互つかみ ・手足体操(手は1･2･3、足は1･2のリズム)	・まずはゆっくり正確にできるようにｱﾄﾞﾊﾞｲｽする。 ・正確にできたら速さにもﾁｬﾚﾝｼﾞさせる。 ・繰り返し練習することでできる達成感をもてるようにさせる。
	一人から二人、そしてグループで巧みな動きに挑戦する中で できる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるようにしよう。	
5分	⑥２人で体操を行う。 ・ｱｲｽﾌﾞﾚｲｸをかね、ﾐﾗｰｽﾄﾚｯﾁをする。 ⑦２人で巧みな動きを高める運動をする。 ・１．２のリズムで足の開閉ジャンプ ・背中合わせで腕を組み、立ち座り	・2人の間にﾘﾗｯｸｽした安心感がもてるようにさせる。 ・お互いの声かけの大切さを伝える。 ・相手を変えて交流を深める。
10分	⑧４ｸﾞﾙｰﾌﾟに分かれて８の字跳びをする。 ・まずはゆっくり縄を回し跳び方を確認する。 ・間をあけずに入る。 ・スピードを上げてチャレンジする。 ⑨３０秒間で何回跳べるか競走する。	・縄の真ん中に印をつけ、跳びやすくする。 ・ﾎﾟｲﾝﾄをｱﾄﾞﾊﾞｲｽする。 ・引っ掛かったときに「どんまい」「おしい」などのﾌﾟﾗｽの声かけを大切にさせる。 ・2回行い、最初に数えた回数と比較させる。
10分	⑩「１.２で１０」のイニシアティブゲームをする。	・グループを温かく見守り、グループが楽しみ、がんばれるようにサポートする。
5分	⑪グループごとに反省会をする。 ・楽しく協力して取り組めたかを簡単に話し合う。	・お互いのがんばりを讃え合えるようにする。
3分	⑫小中学生が前後交互の８列横隊に整列する。 ⑬体操係の号令で大きな声で挨拶をする。	・整然とできるようにさせる。
評　価	①積極的に楽しく取り組めたか。 ②仲間と協力し、交流を深めることができたか。 ③巧みな動きができる喜びを味わうことができたか。	

6　考察

・「小中学生がペアを組みなさい」という条件をつけると交流ができていた。縄跳びのときも条件をつけて仕組んでおけば、より多くの交流ができていたと思われる。

・小学生の中で中学生を少しこわいという感想をもった児童が見られた。女子はよかったが、男子の方が交流するときに難しい場面があった。今後はみんながよかったと思える交流が必要である。

・女子の考えようとする姿はよかった。男子はリーダーシップをとれないまま終わってしまった。

・縄跳びの際、ルールについて、教師間の共通理解ができていなかったため、サポート体制が不十分となり、予想しない生徒の動きへの対応に苦慮する場面が生じた。

（２）　小・中ふれあい交流学習

①　今年度の実施内容

学校名	対象学年	児童数	中学生	時間（分）	活動内容	内　　容
束荷小（５校時）	1～6	24	8	45	交流のできるレクやゲーム	始めに自己紹介や、顔合わせ的要素を取り入れ、子どもたちが楽しめるものになるとうれしい。
束荷小（６校時）	3～6	19		45	音楽的な活動	吹奏楽の演奏を聴かせてほしい。 楽器を紹介してほしい。 楽器の演奏体験をさせてほしい。
塩田小	全校	38	15	45	体育館でAFPY等を用いたレクリエーション活動	塩田小学校は児童数が少ないので多人数での活動がしたい。明るく、元気に、楽しくレクがしたい。AFPYについては打ち合わせの時に説明する。
三輪小	1	29	7	45	パソコンの使い方	お絵かきソフトの起動からお絵かき、終了までをさせたい。教師が指導するので、個別の支援をしてほしい。初めてパソコンを使うので、根気強く対応してほしい。
三輪小	2	13	8	45	工作	いろいろな道具を使って、切ったり糸を通したりする立体制作の支援をしてほしい。
三輪小	3	12	4	45	絵本や紙芝居の読み聞かせ	絵本、紙芝居の読み聞かせをしてほしい。3年生4人に中学生1人がついてもらい、読み聞かせ後、感想の交流や楽しかった本の紹介をしてほしい。
三輪小	4	15	10	45	ソフトバレーボール	4年生2人に中学生1人がついて、ルールや基本的な技能（サーブ・レシーブ・トス・スパイクなど）の指導の補助をしてほしい。
三輪小	5	18	6	45	吹奏楽体験	吹奏楽などの演奏を聴かせてほしい。 楽器にふれる経験をさせてほしい。
三輪小	6	19	7	45	行ってみたい国を英語で紹介	英語を使ったゲームを通して、英語に慣れ親しんだり、行きたい国とその理由を英語で言って聞き取ったりする活動で交流してほしい。
岩田小	1	22	11	45	パソコンでお絵かき	1年生2人に中学生1人がついて、パソコンの立ち上げからお絵かきソフトの立ち上げ、アイテムの使い方までを、教師が指導するので、個別の支援をしてほしい。
岩田小	2	31	5	45	ドッジボール	一緒にドッジボールをしながら、投げ方や逃げ方、ねらい方などをアドバイスしてほしい。
岩田小	3	20	5	45	リコーダー・鍵盤ハーモニカ演奏	リコーダーや鍵盤ハーモニカの苦手な児童について個別支援をしてほしい。
岩田小	4	25	5	45	読み聞かせ・ブックトーク	4年生にふさわしい本の読み聞かせをしてほしい。小学生の頃に読んだ本でおもしろかったものの簡単なあらすじなどを紹介してほしい。
岩田小	5	30	7	45	バスケットボール型ゲーム	一緒にバスケットボールをしながら、投げ方やルールやコツを教えてほしい。
岩田小	6	20	13	45	調理	一緒に楽しみながらできる簡単なおやつを調理して試食したい。
岩田小	おおぞら	2	2	45	読み聞かせ・ゲーム・かるた	ふれあいを楽しみたい。

② 学習後のアンケート結果より 〔(　) は前年度との比較〕

〈小学校〉

設問	思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない
楽しく交流できたか	92% (+2%)	7% (−3%)	1% (+1%)	0% (±0%)
進んで交流できたか	58% (−1%)	34% (+4%)	6% (−4%)	2% (+1%)
自分のためになったか	78% (−5%)	19% (+3%)	3% (+2%)	0% (±0%)

〈中学校〉

設問	思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない
楽しく交流できたか	82% (+3%)	18% (−3%)	0% (±0%)	0% (±0%)
進んで交流できたか	61% (−6%)	35% (+2%)	4% (+4%)	0% (±0%)
小学生は喜んでくれたか	68% (+20%)	31% (−21%)	0% (±0%)	1% (+1%)

(考察)

・ 全体的には前年度と大きな変化はなく、ほとんどの小・中学生にとって、楽しく有意義な学習になっている。

・ 中学生への設問「小学生は喜んでくれたか」については、今年度「思う」に大きく傾いている。自己有用感をよりはっきりと感じることができたものと思われる。

③ 児童・生徒の感想

ア 東荷小学校（３～６年生 「音楽的な活動」）

・ 中学生といろいろ話をしながら楽器をふくことができて楽しかったです。フルートの音が出せるようになりました。中学生になったら、吹奏楽部に入部したいです。(6年生)

・ 「勇気１００%」の演奏は心配していましたが、うまくできてほっとしました。楽器体験では、みんながんばって吹いていてかわいかったです。自分が中１で楽器を始めたころを思い出しました。

イ 塩田小学校(全学年 「AFPY 等を用いたレクリエーション活動」)

・ 知らない人とも進んで話せるゆう気が出ました。「いっしょにやろう。」という声が出せました。中学生も、えがおで「いいよ。」といってくれました。うれしかったです。(3年生)

・ 小学生に教えてあげたら、すごい笑顔で「ありがとう。」と言ってくれて本当にうれしかったです。「じゃんけん、一緒にやろう！」と言ったら、相手も喜んでくれて、「やった」と思いました。

ウ 三輪小学校（１年生 「パソコンの使い方を知ろう」）

・ はじめはどきどきしたけれど、だんだんたのしくなってきました。また、ちゅうがくせいとパソコンがしたいです。みんなやさしくて、いろいろおしえてくれました。

・　最初はどうしたらいいかわからなかったけれど、先輩を見習ってわたしも１年生に教えてみました。小学生は，すぐわかってくれてパソコンを動かしていたのですごいと思いました。小学校の先生にも優しく教えていただいたので迷わずできたと思います。

エ　岩田小学校（２年生　「ドッジボール」）

・　さくせん会ぎのときに、「足もとをねらって。」といわれたので、やったらうまくいきました。なげ方やにげ方をやさしく教えてもらいました。中学生は一人になってもよけていてすごいです。あんなになりたいです。

・　練習を重ねるにつれてみんないいボールが投げられるようになってきたので、とてもうれしかったです。丸いコートで４チームに分かれて試合をしました。小学生が楽しんでくれたのでよかったです。

３　取組の成果と課題

（１）　成果

①　ほとんどの小・中学生が交流を楽しむことができ、小学生は中学生の姿から、中学生は小学生の姿から、互いに学び合うことができた。

②　小・中学生がふれあう時間が増えるよう学習の仕方を工夫することで小学生は中学生に対してあこがれの気持ちを、中学生は小学生に対する思いやりの気持ちを更に抱くことができ、互いに好ましい人間関係が成立してきている。

③　中学生は希望する活動を選び、小グループで小学校教員と打ち合わせをしながら交流学習を進めていくことで、自分の役割を自覚し、自発的に活動することができた。

④　小学６年生を対象とした小・中交流授業を行うことにより、中学校の学習の様子や雰囲気を知ることができ、中学校進学に対する不安感が軽減した。

⑤　連携を進める上で，小・中学生がふれあったり、小・中教職員で話し合ったりすることで､発達段階の違う子どもたちに対する理解が深まり、指導内容や方法等について共通理解することができた。

（２）　課題

①　各校で行事や学校生活時程が異なるため、話し合いの時間がとりにくい。

②　小・中ふれあい交流学習では、中学生が自転車で各小学校に出向くため、安全性の確保に十分配慮する必要がある。

③　配慮を要する子どもについて、学校間の共通理解が必要である。